

ごはん・お米とわたし

黒瀬中学校 一年 寺西 真歩

私の祖父母が水稻作りをしていて、田植え、稲刈は家族全員で作業をします。全部機械化されているのですが、所々人の手が入ります。田の角々はどうしても植継ぎという作業で、人の手で作業します。

米という字は、ハ十八と書いてハ十八回手間がかかるという意味と聞きました。今はそれ程の手間はかかっていなり様に見えます。

窓から見る稲の緑は、本当に緑の絨毯だと思います。その頃はカエルの鳴き声で夜はにぎやかなものです。稲刈の頃になると、アキアカネが飛び、それをツバメが上手くすくい上げる様に口にくわむ様子は、南国に帰る力強さを感じます。

この様に約半年かけ、私達の食卓にキラキラと輝きのある米が出ます。その新米の匂いは釜を開けるとふわーと鼻をさします。

「あー、新米だ。」

と感じられる時です。たき上がりの米を母は
すぐにおすびにしてくれます。弟はそのあつ
あつのむすびが大好きで見ている私までつい
手を伸ばす様になります。
しかし幼児期、お米は私にとって苦手な物
でした。おわんに入っているごはんを見ると、
なぜか食欲がなくなり、食べたくありません
でした。家で作る米なのに、何で食べんのん
かね、とよく言われたものです。

小学生になっても遠足の時の私の弁当はむ
すびが二個。あとは母が色々と果物を入れな
がら弁当箱は、すき間なく入っていました。
兄の影響で空手を習うことになりました。ま
す母は弁当を作る機会が増え、さぞ悩みなが
ら私のお弁当を作ってくれていたと思います。
私は米よりお菓子類が好きだったから。
ある時、テーブルに着くと、
「これくらい全部食べなさいよ。」
と長い間座っていて、涙が流れる方が早い私
でした。でも、兄は空手でたんたん上位入賞

し始めると、母は必ずカツ弁当を作ってくれ
る様になり、ついに優勝をくり返すようにな
りました。もちろん家族全員カツ弁当です。
その時も私は少ない量のカツ弁当でした。

空手は緊張もするし、応援の声を聞くと胸
がバクバクするのですか、面白く色々な人と
友達になれるので、いやではなかつたです。
そのうち私も優勝する事ができるようになり、
ますます弁当作りには熱が入ります。相変わ
らずお弁当のおもすびは二個でしたが、だん

だんと大きくなつていきます。全部食べると
母の顔も安心した様に見えます。身長が伸び
ると同時に、私の食べるお米の量は母と同じ
になる様になりました。今では、

「よくお米がいるわ。」
と言っているのを耳にする様になりました。

兄弟皆スポーツをしているので、お米は栄
養の源です。しかし、一番お米が好きなのは、
今はスポーツをしていない父なのかもしれま
せん。「米」すなわち材料生産者と、「ふは

ん」という調理後、総合的な食事を作ってく
れる家族の中で私は育てられているんだなと
思いました。